

「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン」の配布について

平成15年4月7日
各都道府県、政令市、特別区 衛生主管部（局）動物由来感染症担当者あて
厚生労働省健康局結核感染症課獣医衛生係事務連絡

動物由来感染症対策については、日頃より種々ご配慮いただき感謝申し上げます。

今般、平成14年10月1日付け結核感染症課長通知（健感発第1001002号）「身体障害者補助犬法の施行について」の別添として配布いたしました「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン」（平成13年度厚生科学特別研究）について、施行された法律等に合わせ、表記を一部修正し、別添の改訂版を作成致しましたので配布いたします。

「身体障害者補助犬法」に基づく、身体障害者補助犬の衛生管理にご活用下さい。

(別添1)

身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン

「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドラインの送付について
(平成15年4月7日事務連絡)」(P221参照)

1. ガイドライン策定の目的

身体障害者補助犬の使用にあたり、当該犬の健康を維持し、その生活の質の向上を図るとともに、公衆衛生上の危害の発生防止のため、犬を清潔に保ち、他者に不快感を与えないこと、および人と動物の共通の感染症を予防することを目的として本ガイドラインを設定する。

2. ガイドラインの概略

ここに策定した「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン」は、補助犬の衛生確保のための実践的作業に参画する主体を主に補助犬の利用者と獣医師とし、各々により実施される健康管理について、具体的な内容の提言を行ったものである。

さらに、本ガイドラインは、利用者による健康管理、獣医師による健康管理ともに、犬の健康状態の観察あるいは健康診断的な作業と衛生確保のための予防措置的な作業の2つに分け、それぞれについて記載を行っている。

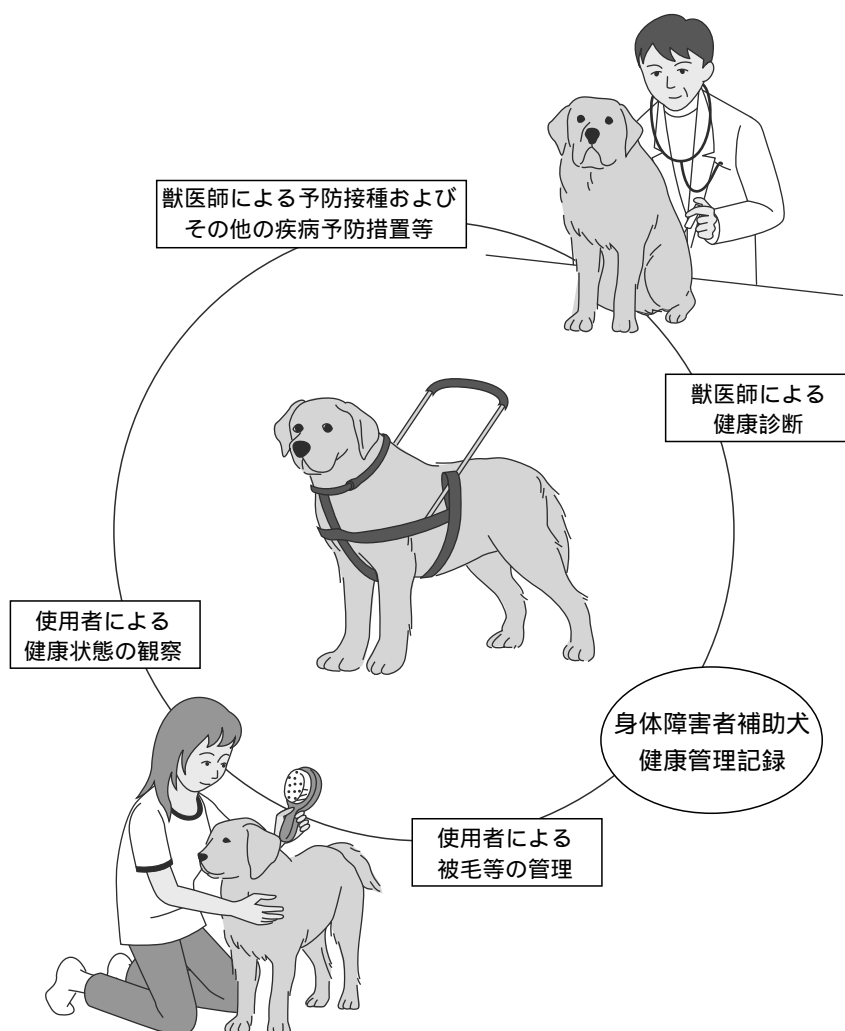
すなわち、利用者により実施される作業は、「健康状態の観察」および「被毛等の管理」とし、獣医師により実施される作業は「健康診断」と「予防接種およびその他の疾病予防措置等」とした。

また、これらの4項目に加え、補助犬利用者と獣医師間の連絡の一方法とすること、および補助犬の衛生確保のための諸作業の結果を記録し、その有用性が広く社会に受け入れられるための一方法とすることを目的として、「身体障害者補助犬健康管理記録」を試み、その活用を推奨した。

なお、身体障害者補助犬の利用者は、犬に起因する感染性の疾病について正しい知識を持ち、その飼育に際して感染の可能性を考慮し、常に自らの健康管理に留意するとともに、他者への感染の防止にも努める必要がある。

以上のガイドラインの概略について、「図1『身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン』の概念」に要約して示した。

図1 「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン」の概念



3. 使用者による健康状態の観察

身体障害者補助犬の使用者は、みずからが飼養および利用する犬の健康状態について絶えず観察を行い、異常の早期発見に努め、何らかの異常が発見された場合には速やかに獣医師による診断を受けるものとする。

使用者により実施される健康状態の観察項目は、別紙「身体障害者補助犬健康チェック項目」に記載の一般状態および体重の測定とする。

また、実施頻度は、一般状態の観察は1日1回、体重の測定は1か月に1回とする。

身体障害者補助犬健康チェック項目

ご自身でチェックできない項目については、どなたかをお願いしてください

- ☆元気はありますか？
- ☆太ったり、痩せたりしてきていませんか？
- ☆食欲はありますか？
- ☆食べ物の好みが変わってきていませんか？
- ☆座り方に異常はありませんか（変な座り方をしていませんか）？
- ☆歩き方に異常はありませんか（変な歩き方をしていませんか）？
- ☆視覚は正常であると思われますか？
- ☆聴覚は正常であると思われますか？
- ☆その他の感覚は正常であると思われますか？
- ☆皮膚の状態に異常はありませんか？ 傷や腫れ、赤みなどはありませんか？
- ☆被毛の状態に異常はありませんか？ 脱毛やツヤが悪いことはありませんか？
- ☆ノミやダニがついていませんか？
- ☆口の周りはお汚れていませんか？ よだれや歯石などはありませんか？
- ☆口の臭いは気になりませんか？
- ☆鼻の周りはお汚れていませんか？ 鼻汁などはありませんか？
- ☆目の周りはお汚れていませんか？ 眼やになどはありませんか？
- ☆耳は汚れていませんか？ 耳あかなどはありませんか？
- ☆耳の臭いは気になりませんか？
- ☆頭をよく振っていませんか？
- ☆お尻の周りは汚れていませんか？ 糞便や発情出血などがついていませんか？
- ☆お尻の周りの臭いは気になりませんか？
- ☆床にお尻を擦りつけるような動作をしませんか？
- ☆爪は伸びすぎていませんか？
- ☆呼吸が苦しそうなことはありませんか？
- ☆咳やくしゃみをしていませんか？
- ☆運動を嫌がるようになってきていませんか？
- ☆糞便と尿は普段と変わりなく排泄されていますか？ 糞便と尿の色や排泄回数、排泄場所は変わりありませんか？

異常を見つげたり、何か心配なことがある場合には獣医師に相談しましょう

本ガイドラインでは、身体障害者補助犬の使用者は、毎日、みずからが用いる犬の健康状態の観察を行うべきであることを推奨したが、この際の観察を容易にし、また、常に一定の項目について忘れることなく観察できるようにすることを目的として「身体障害者補助犬健康チェック項目」を作成した。

「身体障害者補助犬健康チェック項目」は、使用者が利用するチェックリストであることを考慮し、作成にあたっては平易な用語を使用することを試みている。ただし、ここに設定した項目および内容は犬の健康状態の観察として十分なものとする。

また、異常が発見された際に、すみやかに獣医師に相談することを促すため、その旨を「身体障害者補助犬健康チェック項目」の末尾に記載するなどの配慮も行っている。

4. 使用者による被毛等の管理

身体障害者補助犬の使用者は、みずからが飼養および利用する犬の被毛等について、適切な管理を行う必要がある。

使用者により実施される被毛等の管理の実施項目および実施頻度は、以下のとおりとする。

1) 整毛

当該犬の被毛の性状、長さ等にもとづいて、適切なブラシおよび櫛等を選択し、それによる整毛を実施する。

実施頻度は、基本的には1日ないしは数日に1回とする。ただし、各々の犬の状態にもとづき、とくに換毛期等には頻度を増すようにする。

2) 皮膚および被毛の洗浄

当該犬の皮膚ならびに被毛の性状等にもとづいて、適切なシャンプー製品とリンス製品を選択し、それによる皮膚および被毛の洗浄を実施する。

実施頻度は、数週間に1回、ないしは1～2か月に1回程度とする。

3) 剪毛

当該犬の被毛の性状、長さ等にもとづいて、適切なはさみ等を選択し、それによる剪毛を実施する。

実施頻度は、基本的には1年に1～2回とする。ただし、各々の犬の状態にもとづき、必要に応じて頻度を増すようにする。

4) 爪切り

爪が過度に伸張した場合には、爪切りを行う。

実施の時期は、各々の犬の状態によるが、起立時に四肢の爪が床面に接触しはじめたときを目安とする。

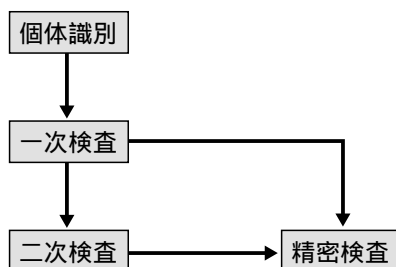
5. 獣医師による健康診断

身体障害者補助犬の飼養および利用にあたっては、犬の衛生を確保するため、小動物臨床に従事する獣医師による健康診断を定期的に実施し、衛生管理の啓発と疾病の早期発見に努め、何らかの異常が発見された場合には速やかな対応を行わなければならない。

健康診断は、個体識別の後、まず、一次検査として一般的な諸検査を行い、それによって異常が疑われた場合には、二次検査を実施する。また、一次検査および二次検査において異常が認められた例に対しては、必要に応じて各々の場合に適した精密検査を適宜に実施する（図2）。

獣医師による健康診断の実施頻度は、一次検査のうち、問診、視診、触診、打診、聴診および体温、脈拍数、呼吸数の計測については1年に2回以上、血液学的検査ならびに糞便検査については1年に1回以上実施するものとする。また、二次検査および精密検査は、個々の例に応じて適切な頻度で実施する。

図2 獣医師による健康診断の流れ



【個体識別】

身体障害者補助犬の個体識別は、「身体障害者補助犬法」第12条に規定されている「厚生労働省令で定める表示」を確認することにより実施する。

さらに、当該犬の品種、性別、毛質、毛色、その他の外貌上の標徴を動物診療施設の診療記録簿に詳細に記載し、次回以降はその記載および「身体障害者補助犬健康管理記録」における記載と併せて個体識別を行う。

また、マイクロチップを使用している場合には、それを利用することが望ましい。

【一次検査】

一次検査の実施項目は以下のとおりとする。

1) 問診

補助犬の飼い主から当該犬の一般状態等を聴取し、とくに前回の健康診断以降の異常の有無について調査する。

この際、「身体障害者補助犬健康管理記録」を活用する。

2) 視診

補助犬の全身について視診を行い、異常の有無を観察する。

観察項目は、元気の有無、体格、食欲、栄養状態、姿勢、歩様、感覚の状態、被毛の状態、天然孔の異常の有無等とする。

3) 触診

補助犬の全身について触診を行い、異常の有無を観察する。

観察項目は、皮膚および被毛、体表リンパ節、関節、指趾端の状態等とする。

4) 打診

補助犬の主に胸部および腹部について指々打診を行い、異常の有無を観察する。

すなわち、打診部位を手指により叩打し、その際の振動音、すなわち打診音を聴取する。

5) 聴診

補助犬の主として胸部および腹部の聴診を行い、異常の有無を観察する。

聴診の主たる対象は以下の各項目とする。

①心臓

心拍動のリズムの変化、心内雑音の有無、心膜の摩擦音の有無等

②呼吸器系

喉頭、気管、気管支および肺胞から発する音、胸膜の摩擦音等

③消化器系

消化管の蠕動音等

6) 体温、脈拍数、呼吸数の計測

補助犬の体温、脈拍数、呼吸数の計測を行い、一般的正常値からの逸脱の有無を検討する。

7) 血液学的検査

実施が推奨される血液学的検査項目は、以下のとおりとする。

①赤血球数 または ヘマトクリット値

②白血球数

③犬糸状虫マイクロフィラリア

8) 糞便検査

実施が推奨される糞便検査項目は、以下のとおりとする。

①理学的性状

糞便量、色調、水分含有量（下痢の有無）、臭気、未消化物および異物等の混在の有無

②寄生虫学的検査

原虫の栄養型、シスト、オーシスト、蠕虫卵、幼虫、成虫、条虫の片節

【二次検査】

一次検査により異常が疑われた場合には、以下の検査を実施する。

1) 血液生化学的検査

実施が推奨される血液生化学的検査項目は、以下のとおりとする。

- ①グルコース
- ②尿素窒素
- ③総蛋白
- ④アラニンアミノトランスフェラーゼ
(グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ)
- ⑤犬糸状虫成虫循環抗原
- ⑥抗レプトスピラ抗体

2) 尿検査

実施が推奨される尿検査項目は、以下のとおりとする。

- ①理学的性状
尿量、色調、混濁度、濃度、粘稠性、臭気、比重、pH
- ②化学的性状
糖質、蛋白質、血色素（潜血）、ウロビリノゲン、ケトン体、亜硝酸塩

3) 糞便検査

下痢、血便等が認められた場合には、糞便の細菌検査等を実施する。

【精密検査】

一次検査および二次検査により異常が疑われた場合には、必要に応じてさらに種々の精密検査を実施する。

精密検査の実施項目は、個々の例に応じて適宜に選択する。

6. 獣医師による予防接種およびその他の疾病予防措置等

身体障害者補助犬の衛生確保のため、予防接種を定期的には実施することは必須であり、加えてその他の疾病予防措置等を講ずることが望ましい。

【実施すべき予防接種】

身体障害者補助犬への接種を行うべきワクチンは、以下のものとする。

これらのワクチンの接種頻度は、1年1回とする。

- 1) 狂犬病ワクチン
- 2) 犬レプトスピラ病ワクチン
- 3) 犬パルボウイルス感染症ワクチン

【実施が望まれる疾病予防措置】

身体障害者補助犬に対して、少なくとも以下の疾病予防措置を講ずることを推奨する。

1) 犬糸状虫症の予防（犬糸状虫成虫寄生予防薬の投与）

犬糸状虫症予防薬を適宜に選択し、その薬剤の用法にもとづいて適切な投与を実施する。

2) ノミおよびマダニの寄生予防

ノミおよびマダニの駆除薬、とくに残効性が高い薬剤を適宜に選択し、その薬剤の用法にもとづいて適切な投与を実施する。

【避妊および去勢処置】

発情期における問題行動の発生、および発情期にある他の犬から問題行動を受ける可能性があると思定される例においては、避妊手術あるいは去勢手術の実施、または発情回避のための薬物のインプランテーションを行うことを推奨する。

7. 「身体障害者補助犬健康管理記録」の作成とその活用

身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理の記録およびその証明のため、「身体障害者補助犬健康管理記録」を作成し、活用することが望まれる。